

Title	学校組織における役割期待のズレと役割葛藤の研究
Sub Title	
Author	加藤健志(Katou, Takeshi) 関本昌秀
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1981
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001981-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生氏名	加藤健志	主査	関本昌秀	教授
		副査	石田英夫	教授
所属ゼミナール	関本昌秀研		奥村昭博	助教授

「学校組織における役割期待のズレと役割葛藤の研究」

本研究は、学校組織運営に対する役割理論的アプローチの必要性をあきらかにするために試みられた事例研究である。事例としては、宮城県仙台市にある私立高校、仙台育英学園が利用された。現在、同学園は、教頭を中心とする教員集団の役割関係において相互に矛盾を含んだまま調整されることもなく、組織行動が展開されている。そのため、組織の中にさまざまな誤解や衝突が発生し、組織メンバーのそれぞれにマイナスの影響をあたえている。そこで、「組織が安定的に効率よく動くためには、組織内の役割体系が互いに矛盾なく線然と整備され、またそれが組織のメンバーの役割期待の中に適切に反映し、かつ、その役割期待に準じた役割行動が展開されることが重要だ」という観点から同学園内の役割期待のズレが、どのような役割行動の混乱と葛藤を引き起こさせているのか、その実態を探索し、教頭の役割行動のあるべき姿とその改善点を提言することを第2の試みとしている。

ところで、本論文では、第1、2章において役割理論研究と学校経営研究の流れについてのべている。また、第3章では教頭の地位と役割に関する形式論と実質論の比較をおこなっている。第4章では、同学園の説明、特に同学園をとりまく外部環境要因と組織をあきらかにした。第5、6章では、役割理論的アプローチの必要性とそのアプローチの方法について説明している。第7章では、調査の結果に関する分析を教頭を中心とする教員集団の役割関係にスポットをあてておこなった。その結果、やはり、学校という組織の中においても、校長、教頭、教員相互の間に役割期待のズレや役割行動の知覚のズレ、そして役割葛藤がかなりはつきりとみられた。そのことについては第8章でくわしく述べたが、特に、教頭と教員との間でそれが顕著であった。これらのズレは、現在、同学園で発生している諸問題に関する説明変数として、非常に重要な示唆を同学園の校長、教頭にあたえたのである。